

1日目上勝町(2024年9月26日)

今回の研修旅行は、徳島空港から海岸沿って、バスで1時間ぐらい離れている徳島県中部にある上勝町のゼロ・ウェイストタウンから始まりました。



そこで合同会社パンゲアの野々山 聰さんに上勝町とゼロ・ウェイストタウンの話を伺いました。2003年、日本で初めてのゼロ・ウェイスト宣言から17年、上勝町では町民一人一人がごみ削減に努めリサイクル率80%以上を達成することができました。

野々山さんの紹介でゼロ・ウェイストタウンの特徴もより理解を深めました。ゴミの収集車は走っていない、43分別のゴミは、町民がゼロ・ウェイストセンターに自ら持ってきているのは一番大きい特徴だと思いました。歳をとっている老人たちのゴミは、回収しに行くことになっています。また、生ゴミはすべて家庭処理になっており、購入補助があるため、自己負担一円で匂いしない生ごみ処理機を家に置けることができることにも印象深かったです。

上勝町の企画環境課に所属している栗林さんにも話を聞かせ、質疑応答の時間はさらに勉強しました。



以下は私たちが用意したすべての質問です。赤になっているのは、私たちが質問する機会があったものを表しています。

リサーチクエスチョン（上勝グループ）：

1. 上勝がゼロ・ウェイスト政策を追求する動機は何ですか？
2. 上勝ではゼロ・ウェイストを達成するためにどのような具体的な廃棄物管理戦略が実施されましたか？
3. 上勝の廃棄物管理に対するアプローチは、コストと効率の観点からどうなっていますか？
4. 上勝がゼロ・ウェイスト政策を実施する上で直面している主な課題は何ですか？また、その課題を克服するにはどうすればよいですか？
5. ゼロ・ウェイストの取り組みは、経済的および社会的に上勝の住民の日常生活にどのような影響を与えましたか？
6. 上勝はゼロ・ウェイストのプロセスに住民をどのように関与させ、どのような教育プログラムや啓発プログラムを実施していますか？
7. 上勝で最も排除が難しい廃棄物の種類は何ですか？市はそれらにどのように対処していますか？
8. 上勝のゼロ・ウェイスト目標を支援する上で、地元の企業や産業はどのような役割を果たしていますか？
9. ゼロ・ウェイスト・イニシアチブは上勝町の観光業にどのような影響を与え、環境観光客や環境研究者を惹きつけましたか？
10. 上勝町でゼロ・ウェイスト・ライフスタイルに移行することによる経済的メリットは何ですか？
11. 廃棄物管理イニシアチブの意思決定プロセスにコミュニティはどのように関与していますか？
12. 上勝町がゼロ・ウェイストの町になった経験から、他のコミュニティは何を学ぶことができますか？
13. 上勝町独自の文化的または社会的要因が、ゼロ・ウェイストの取り組みの成功に貢献していますか？
14. 上勝町は廃棄物管理の実践を強化するためにどのような革新や技術を採用しましたか？
15. 上勝町の廃棄物管理の実践を改善するために、企業組織や他の自治体とどのようなパートナーシップや協力関係が確立されていますか？
16. 上勝町は、廃棄物の削減とコミュニティの持続可能性の促進を継続するた

めに、どのような将来の目標と戦略を立てていますか？

17. 南アフリカの国々は、時にはリソース不足のために、廃棄物管理システムが不十分であるという多くの問題を抱えています。また、廃棄物の分別もありません。

18. 資源の少ない国はあなたから何を学べますか？ むしろ、あなたからアドバイスできることは何ですか？

19. 日本の他の町であなたを見習って成功した町はありますか？

20. あなた方の町は人口が少ないのでゼロタウンを達成できたと言う人もいますが、東京、ニューヨーク、北京、パリなど人口の多い都市では難しいと思います。それについてどう思いますか？



例えばいらないものをリユースで価値のあるものに変えるくるくるショップの商品が、外国人の方や日本文化に興味ある方たちが購入していることと、パンゲアを通じて一年間およそ 2300 人（上勝町人口の約 2 倍）が上勝町に訪れてることで、より多くの人に上勝町の存在を広がることにつながります。また上勝町は高齢化町なので、ゼロ・ウェイストがどれほどうまくても、高校がないため、若者はどんどん街から離れていき、学んだことを活かすのは難しいことから、多くの環境問題は環境の観点だけでは解決できず、社会問題と結びついていることが多いことに初めて気づきました。

上勝町のブランドになっているゼロ・ウェイス トタウンは他に様々な活 用している事業の話も聞 いた上、見学する機会も ありました。ゼロ・ウェイ スト取り組みをよりわか るため、見学はゴミステ ーションから始まり、く るくるショップの商品と HOTEL WHY（外見のみ）な ど、様々な施設を一周ツ アーさせていただきました。

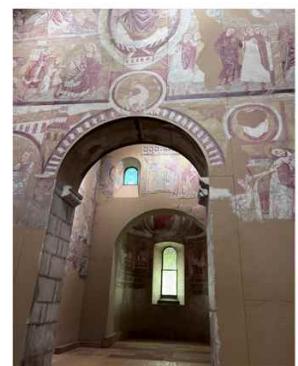


午後は徳島県にある大塚国際美術館の鑑賞に行きました。大塚国際美術館の広さと作品数の多さは驚かされました。



美術館に入ったとまず目に映るのは聖書の物語が描いている「スクロヴェーニ礼拝堂」です。ここは世界 26 カ国 190 余りの美術館が所蔵する古代から現代までの西洋名画を約 1000 点、オリジナル作品と同じ大きさに陶板で再現し展示しています。たった 1 カ所で世界の美術館巡りができる、とても贅沢な旅行気分が味わえました。

また、大塚国際美術館では、世界中に有名な絵画のほとんどをここで見ることができます。国際的なピカソやミロなどを含む有名絵画を、陶磁器に、原寸大に複製したということは珍しいだと思います。実際の絵画を見るのとは違いますが、陶板に描かれた作品は非常に精巧で、色彩やディテールの美しさが見事に表現されています。名作の展示も時代や国ごとに分かれており、美術史の流れを一度に体感できる構成が魅力だと思います。



この中に、いくつかの作品が特に印象に残りました。まずは、ゴッホ作「花瓶のヒマワリ」全7点が世界から集結して、「7つのヒマワリ」を陶板で原寸大に再現しました。アートコスプレもできました。まるで絵画の世界に飛び込みながら絵画の主役になりきって撮影ができるというイベントが参加しました。



他にはフェルメール作の「真珠の耳飾りの少女」があります。



ロココ美術全盛期を代表する画家ブーシエの傑作「ポンパドゥール夫人の肖像」にも見ました。ポンパドゥール夫人の華やかなドレスに合わせてピンク色のバラやダリア、ラナンキュラスなど約1万本のアートフラワーを使って、エレガントな装飾のカウチソファに腰かけて、記念撮影をしました。



最後に、大塚国際美術館は展示スペースが広大で、世界各国から集められた名作が「陶板名画の集合体」という形で、遠い国の名所を実際に訪れるどのように鑑賞できるという贅沢な体験だと思います。

2日目高松・豊島(2024年9月27日)

9月27日、私たちは高松港管理事務所に向かい、香川県庁の矢船さんとお会いしました。矢船さんは、豊島廃棄物問題についてプレゼンテーションを行い、私たちの質問にも親切に答えてくださいました。

1970年代、危険な廃棄物が豊島に持ち込まれ、不十分に保管されていました。地元住民は何年にもわたり、廃棄物の野焼きや有害物質の地下水への漏出の影響に苦しんできました。最終的に1990年、兵庫県警の調査によって豊島での出来事が明らかになってから、訴訟、法律の改正、そして長い清掃プロセスが続きました。



矢船さんは、1970年代に松浦氏が廃棄物管理ライセンスを取得するために官僚に圧力をかけ、運営が一見合法に見えるように書類を変更した方法を説明しました。同時に、香川県庁が犯したミスを率直に認め、2000年に豊島の住民との合意以来、過去の過ちを償い、豊島の状況を改善するために政府がどれほど努力してきたかを示してくれました。彼らは、当時の困難や廃棄物処理に関する考慮事項をよりよく理解する手助けとなった彼の誠実な回答に非常に感謝しています。

短い昼食休憩の後、私たちは2006年の卒業生である大石さんと、次の数日間のガイドであるあいさんに会いました。一緒に高松港から豊島へ向かう船に乗り、移動中に見つかったことを全部説明受けました。豊島に着くと、石さんがすでに私たちを待っていました。石さんは豊島の地元住民で、豊島廃棄物問題が公にされたときにはまだ中学生でした。彼とともに、廃棄物の埋立地跡に入る貴重な機会を得ました。2017年以降、すべての廃棄物は撤去されましたが、有害物質が地面や水、最終的には海に無制限に漏れ出したため、地下水の処理は続いています。安全基準は満たされていますが、水質に関する環境基準ははるかに厳しく、その基準が満たされるまでに62年間もかかったと言われています。



この場所に投棄されたシュレッダーストは、最高点で5階建ての高さになっていました。設置されているマーカーを使って、石さんは「以前は臭いがひどかったので、近寄った時に目が潤ってしまった」と、状況の厳しさを想像させてくれました。松浦さんの行動が違法と判断され、中止されるまで、豊島住民による7,000件の行動が真

剣に受け止められるまで続きました。香川県と豊島の住民は、長年の議論の末、2000年に合意しました。水深18メートル、長さ377メートルの壁は、汚染された水がこれ以上海に漏れるのを防ぐために、海に建設されました。豊島では、中間貯蔵施設を建設し、コンテナに入れて密閉し、専用の船で輸送し、豊島から直島に新設された廃棄物処理施設まで輸送しました。建設・運営費は約800億円で、香川県が約7割、国が約3割を負担しています。

豊島のこころミュージアムには、高さ約2.5~3メートルのシュレッダースト廃棄物のサンプルがあります。一見すると廃棄物に土がたっぷり混じっているように見えますが、石さんは、これは経年劣化によるもので、土ではなく廃棄物だけだと説明してくれました。石さんから、私たちは豊島の住民の努力、希望、不安について知ることができました。彼らの多くは、ゴミ捨て場がきれいになるのを見ることなく亡くなっています。人口減少により、豊島の住民は自分たちの物語が忘れ去られるのではないかと恐れていますが、豊島の人々の努力のおかげで日本は廃棄物に関する法律を改正し、新車購入時に支払うリサイクル料金を新たに追加しました。



私たちに深い印象を残したのは、豊島の住民の犠牲です。松浦氏の違法行為を告発し、香川県に助けを求めて闘ったことで、住民は社会の批判にさらされました。「この住民は3回も亡くなりました」と石さんは説明します。最初の死は、廃棄物の野焼きが住民の健康に影響を与えたためです。2番目の死は、住民を守るべき香川県庁の行政に失望したためです。そして最後に、3番目の死は社会によるものでした。日本社会は、松浦氏の犯罪を責める代わりに、なぜ地元住民がもっと早く松浦氏を止めなかつたのかと疑問に思いました（豊島事件について知っている人は14万人のうち800人しかいません）。この悲惨な出来事の間、住民は豊島の環境を回復するための努力を続け、何年もかけて世論が自分たちに有利に変わったことに気づいていました。

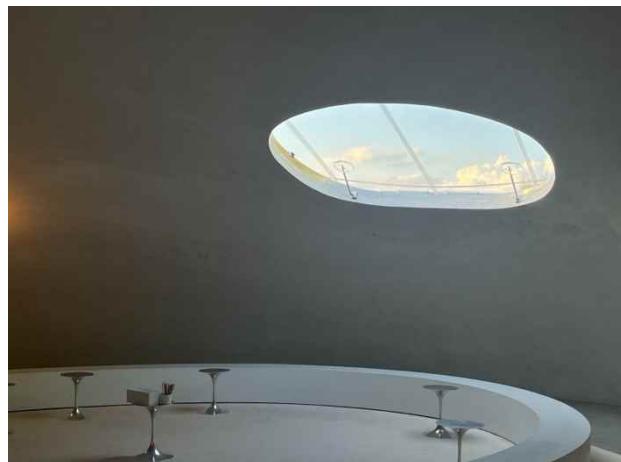


豊島に投棄された廃棄物は地元産ではなく、東京など経済成長著しい日本国内の地域から輸入されたものであるため、豊島住民は廃棄物は地元の問題ではなく社会問題であるという立場を正しく擁護しました。地元住民はより裕福で繁栄した地域の経済成長の重荷を背負わされてきたが、今やその被害からの回復には彼らの助けが必要でした。今日の世界情勢では、同様の状況が、経済成長の重荷を背負う高所得国と低所得国との間で起こっています。私たちは過去の過ちから学び、現在の不均衡をできるだけ早く修正すべきです。待つ時間が長ければ長いほど、人々が私たちの重荷を背負うことで苦しむ時間が長くなり、私たちが壊したもの修復するためのコストも高くなるではないでしょうか。



石さんから豊島の体験を聞いた後、私たちは豊島美術館を訪れました。ベネッセアートサイトの一部として、豊島の棚田の一つに建てられたコンクリートの建物です。少し外を歩いた後、私たちは裸足で建物に入り、地面から水滴がゆっくりと湧き上がってくる中、注意深く建物内を進みました。水滴がいくつかの場所にたまり、別の場所では流れ去る様子が見受けられました。訪問者は静かにすることが求められ、非常に静謐な体験となりました。私たちはその瞬間に立ち止まり、天井にある2つの大きな楕円形から伝わってくる自然の音を吸収しました。それによって、豊島の自然と一体になっているように感じました。

独特の建物のデザインにより、館内の音は増幅されました。そのため、水滴が落ちる音をより楽しむことができましたし、訪問者が部屋を歩くことで発生する衣服の静かなざわめきも、独特の音響体験を生み出しました。訪問時は本当に美しい天気で、夕日が沈みかけている時間帯であったため、部屋の美しい眺めを楽しむことができました。沈みゆく太陽の温かさが床にたまつた水に反射していました。本当に美しい体験で、当日の天候がこの建物の体験に大きな影響を与えていたため、別の日に訪れることでまったく新しい景色を楽しむことができるでしょう。



建物内では写真撮影が禁止されていましたが、美術館のショップとカフェでは撮影が可能でした。ショップとカフェも美術館と同様に建設されています。

私たちは餃子で一日の終わりを迎えました。餃子は何かの完璧な締めくくりを象徴する食べ物です。私たちは皆一緒に座り、話したり笑ったりしながら、その日の体験を基にさまざまな意見を交わしました。豊島事件は、醜い事実であっても忘れてはいけないものであり、それらにも世代から世代へと引き継がれる価値があることを教えてくれました。



3日目豊島と犬島（2024年9月28日）

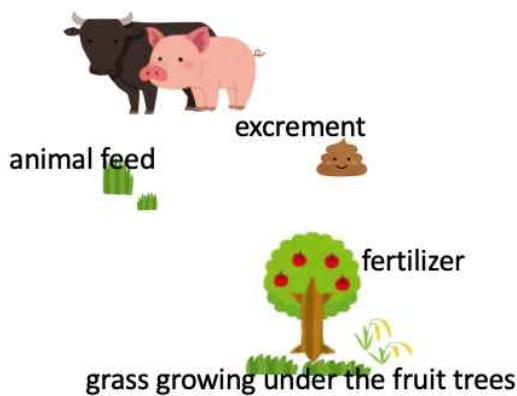


9月28日の朝、私たちは豊島出身の藤崎さんへお話し聞きました。彼は豊島の名前の由来についての理解を共有し、豊島の自然環境、人口、資源についての概要を説明してくれました。豊島は比較的人口が少なく、水、石、砂などの豊かな自然資源を持っています。



藤崎さんはその後、農民福音学校の歴史について語りました。この学校は、昭和時代の著名なキリスト教社会運動家である賀川豊彦によって1933年に設立されました。その後、賀川豊彦の弟子である農業教育者の藤崎清一（藤崎さんの父）が1947年に瀬戸内に豊島農民福音学校を設立しました。

さらに、彼は学校の指導理念である「三つの愛」について紹介しました。それは、神への愛、人々への愛、そして地球への愛です。この学校では、学生は宗教、文化、芸術について学ぶだけでなく、パン作り、搾乳、裁縫などの実践的なスキルも身につけ、バランスの取れた成長を促進しました。



Mr. Fujisaki also explained the agricultural theory of that time, particularly "three-dimensional agriculture" or circular agriculture. This concept involved not only rice cultivation but also vegetable and fruit farming, livestock breeding, and agricultural product processing, aiming for an ideal rural community.

Livestock were raised on the hills, and due to the lack of modern transportation, animal waste was easily transported downhill to fertilize fruit trees. The grass growing under the fruit trees, in turn, served as feed for the livestock, creating a sustainable agricultural cycle.



話を聞かせた後、藤崎さんは旧学校の跡地を案内してくれました。そこには、もともとの窯や燻製箱がまだ保存されています。これらの施設は現在、ピザ作りに頻繁に使用されており、さまざまなパンやケーキのレシピが壁に展示されていて、過去の活気ある学びの環境を垣間見ることができました。



犬島は、その初期には日本の主要な石掘り場でした。大阪城を建設するために使用された石の一部は、犬島から採取されました。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、犬島のような瀬戸内海の小さな島々では、日本の経済成長と金属需要の増加により、大規模な製錬所が建設されました。しかし、製錬業の衰退に伴い人々は去り、現在の人口はわずか30人です。

ら採取されました。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、犬島のような瀬戸内海の小さな島々では、日本の経済成長と金属需要の増加により、大規模な製錬所が建設されました。しかし、製錬業の衰退に伴い人々は去り、現在の人口はわずか30人です。



すべてのアート作品を見た後、アーティストは美術館の特別な雰囲気の中でこの分野を洗練させようとし、表現しきれないものを繰り返し表現しているように思えます。彼の作品において、日本文化に警鐘を鳴らし続けた三島由紀夫によって引き出された文化的イメージは、アーティストが近代産業の汚染についての反省や問いかけを伝えたいのかもしれませんと感じました。アーティストは、これらのインсталレーションの瞬間を体験し、その後の反省を通じて、現代の産業遺産の裏に隠された記憶や歴史の意味を観覧者がさらに理解できることを願っているでしょう。

犬島ホッピーバーは、小さな空き家とその隣の空き地を改装したプロジェクトです。





犬島精錬所美術館を見学した後、私たちは犬島ホッピーバーへ向かいました。石渡さんの親切に深く感謝しています。ホッピーバーでは、私たちのお気に入りの飲み物を楽しみながら、石渡さんのバーについての話を聞きました。

ホッピーバーは古い家を改裝して作られており、いくつかの古いガラス窓を保存しています。自然の風景を最大限に活かすために、長いガラス窓とバー内の小さな庭をデザインしました。これにより、私たちは犬島の美しい自然を楽しみながら飲み物を味わうことができました。

観光客にとって、芸術と歴史に彩られた犬島でこのようなよくデザインされたバーを見つけることは、旅に特別な彩りを添えます。



最後に、セミナーのみんなと石渡さんのおかげで、私たちはベネッセハウスで最高のディナーを過ごしました。

4日目直島（2024年9月29日）

直島は、瀬戸内海に位置し、本州と四国の間にあり、香川県の一部です。直島は、ベネッセ直島アートプロジェクトの一環として、現代アートの美術館やインスタレーションで有名な島です。この島は、小さな漁村から日本の現代アートと建築の中心地への変貌を遂げたことで、国際的な注目を集めています。

豊かな自然、豊かな歴史、素晴らしいアートに満ちた直島は、日本で訪れるべき場所の一つであり、2019年以降、最も訪問者が多い場所の一つとしてランクされています。訪れる人の多くはアメリカ、韓国、中国、オーストラリア、フランスから来ています。この島は、外国人だけでなく地元の人々にとって多くの見どころや体験が用意されています。

上智大学大学院地球環境学研究科の織教授のセミナーの学生たちは、直島に到着し、島の素晴らしいアート作品に没入する準備を整えました。

A. アートハウスプロジェクトツアー

私たちの一日は午前10時頃、アートハウスプロジェクトツアーから始まりました。このプロジェクトは、直島の空き家をアート作品に変えるものです。1998年に始まったこのプロジェクトは、現代アートと島の伝統的な建物を結びつけることを目的としています。アートハウスプロジェクトは6つありますが、私たちは3つのみを訪れることができました。

1. 角屋 (Kadoya)

- アーティスト：宮島達男 (Tatsuo Miyajima)
- 開館：1998年
- 説明：角屋は、約200年前に建てられた修復された家です。この家には「Sea of Time '98」と呼ばれるデジタルインスタレーションがあり、125個のLEDデジタル数字が水中に浮かんでいて、時間の流れと人間関係を象徴しています。各カウンターの速度は、島の地元住民によって設定されています。これはプロジェクトの一環として最初に変貌を遂げた家です。
- メモ：学生たちが最初の場所に向かう途中、担当教授がアートセンターの近くの通りで見かけた猫と素敵な交流を持つという予想外の特別な瞬間に出会わしました。みんなが参加し、注目を浴びて楽しそうに遊ぶ黒猫の直島に癒されました。





2. 護王神社 (Go'o Shrine)

- アーティスト: 杉本博司 (Hiroshi Sugimoto)
- 開館: 2002 年
- 説明: 護王神社は、既存の江戸時代の神社を基に、杉本博司によって改装された神社です。この神社は、神社の構造に基づいた建物を通じて、古代日本の精神を表現しています。古代と現代の要素を組み合わせたもので、日本の古墳時代を思わせる地下石室があります。過去と現在の間の精神性と連續性を反映しています。
- メモ: チームはその後、護王神社を訪れ、美しい景色に恵まれました。フィリピンからの特別な岩で装飾されたこの神社は本当に美しいです。主祭殿に続く光学ガラスの階段があり、他にも神社の下に続く階段があり、そこでは生と死の違いを描写しています。神社の下の階段は、アーティストによってデザインされた洞窟を通じてアクセスでき、訪れる人々がアートに没入できるようになっています。



3. 南寺 (Minamidera)

- アーティスト: ジェームス・タレル (James Turrell)
- 建築家: 安藤忠雄 (Tadao Ando)
- 開館: 1999 年
- 説明: 南寺は、かつてこの場所に存在した寺にちなんで名付けられました。ジェームス・タレルのアート作品が、安藤忠雄によって設計された木造の建物の中に置かれています。訪問者は、完全な暗闇の中からゆっくりと光を見つけ出すプロセスを体験します。光と暗闇が交錯し、知覚に挑戦する体験を提供する没入型の空間です。
- メモ: 神社を後にした学生たちは、南寺へ向かい、日本だけでなく世界的にも珍しいアート作品を楽しむことになりました。参加者が光を見るまで、完全な暗闇の中に座るという体験が含まれています。多くの人にとって非常に興味深いものでした。残念ながら、内部での撮影は禁止されているため、現地の写真を 1 枚も撮ることができませんでした。それでも、ユニークな体験でした！

私たちはこれらの 3 つの家を訪れただけでしたが、訪れなかつた 3 つのアートハウスプロジェクトもあります：

4. 石橋 (Ishibashi)

- アーティスト: 千住博 (Hiroshi Senju)
- 開館: 2006 年
- 説明: 石橋家は塩作りの事業で栄えました。彼らの家は、千住博のアート作品を展示するために修復されました。作品には、瀬戸内海の風景にインスピライアされた絵画と庭からなる「空の庭 (Emptiness)」や、自然光の下で見ることができます。「滝」が含まれています。このプロジェクトは、地元の環境とアート作品を結びつけています。

5. 墓会所 (Gokaisho)

- アーティスト: 須田悦弘 (Yoshihiro Suda)
- 開館: 2006 年
- 説明: 墓会所は、かつての囲碁プレイヤーの集まる場所に建てられました。須田悦弘は、彼の木彫り作品「春の木」と本物のツバキを対比させるデザインを作成しました。一つの空間には彼の彫刻が置かれ、もう一つの空間には境界を定義するためのオブジェクトであるケッカイのみが特徴となっています。小さく静かな空間には、小さく精巧に彫られた花が隠されており、訪問者が周囲に注意を向けるよう促

しています。

6. はいしや (Haisha)

- アーティスト: 大竹伸朗 (Shinro Ohtake)
- 開館: 2006 年
- 説明: はいしやは、かつて地元の歯科医の家兼オフィスでしたが、大竹伸朗によって彫刻的かつグラフィックなアート作品に完全に変貌しました。彼女は、使われなくなった船、鋼の塔、そして彼女の絵画やコラージュ技術を用いて夢のイメージを追いかけるプロセスを実現しようとしています。このプロジェクトはコラージュやさまざまな素材で溢れしており、創造性の爆発を反映しています。これは、彼の他のより伝統的なプロジェクトとは対照的です。

B. 直島プロジェクト「水」へ

その後、学生たちはナオシマプラン「水」でリラックスした時間を過ごしました。この施設は非常に美しく、ナオシマの本村地区の古い町並みからインスピアイアされた風や水などの動く素材を表現する構造的な特徴があります。ここは、学生たちが水の価値を再考し、持続可能な利用を常に考える場所です。



直島プロジェクト「水」は、島の芸術的ビジョンの重要な部分です。1980 年代にベネッセ社と建築家安藤忠雄の共同で構想されました。このプロジェクトは、アート、建築、自然が調和して共存できる場所としてナオシマを発展させることを目指しています。「水」のインсталレーションはこのビジョンの一部であり、生命と再生の象徴として水の要素に焦点を当てています。このインсталレーションは1995 年に完成し一般公開されました。インсталレーションは人間と自然の関係を強調し、環境テーマに対する反省を促します。

C. ベネッセアートプロジェクトに関する講義

ベネッセアートセンターの社長から学ぶことほど重要で特別なことはありません。学生たちは、福武氏からこの組織の歩みや、長年にわたって管理してきたアート作品についての1時間の講義を受けました。



1. 講義中、私たちはベネッセアートプロジェクトの背景や動機について学びました。このプロジェクトは、アートを通じてナオシマとその周辺の島々を復活させることを目指しています。以下は、いくつかの重要なポイントです：

1. 人口の変化:

- ナオシマの現在の人口は約 3,000 人ですが、かつては約 8,000 人の人口がありました。
- イヌジマのかつての人口は 5,000 人でしたが、現在は約 25 人しか住んでいません。

2. 豊島は、95 万トンの不法投棄された下水によって深刻な影響を受け、地域の環境が破壊されました。

3. アートプロジェクトの起源:

このプロジェクトは、ベネッセ株式会社の創設者である福武哲彦氏と、当時のナオシマ町長との協力により始まりました。興味深いことに、前の町長は就任する前は寺の僧侶でした。彼らの最初のビジョンは子供たちのためのサマーキャンプを作ることでしたが、そのアイデアは次第にアートを主な焦点とするより大きなものへと進化しました。

4. 目標と目的:

ベネッセアートプロジェクトの目標は、戦後日本の発展に挑戦し、批評することです。第二次世界大戦後、日本は急速な経済成長を遂げましたが、これ

により深刻な公害と公衆衛生の危機が引き起こされ、多くの人々が産業廃棄物や環境の放置による病気に苦しむことになりました。このプロジェクトは、日本社会の構造や組織について疑問を投げかけ、経済成長が市民の福祉よりも優先されることが多いという点に焦点を当てています。

5. 安藤忠雄の役割:

大阪出身の著名な建築家である安藤忠雄氏は、このプロジェクトにおいて重要な役割を果たしました。ベネッセアートサイトのデザイン、特に彼の建築は、政府の環境や社会問題への無視を批判することで知られています。彼の作品は、自然の風景と現代的なデザインを融合させ、人間と環境の関係を強調しています。

6. ベネッセハウス美術館:

ベネッセハウス美術館では、アメリカのアーティストによる作品を含むさまざまな作品が展示されています。これらのアートワークは、反省や後悔のテーマを探求し、日本の歴史、特に第二次世界大戦中のアジア諸国に対する行動に焦点を当てています。特にある作品は、日本の過去の行動に対する後悔と、より良い未来への希望を表現しています。アーティストのメッセージは、日本が隣国との関係を重視し、和解を望んでいることを反映しています。

D. 昼食と直島港での最終訪問

昼食には、地元の食材と持続可能な取り組みに焦点を当てた伝統的なレストラン「玄米心食あいすなお」で、日本のベジタリアン料理を楽しみました。



私たちの最終目的地は、直島港で、島の芸術的な変革の象徴している草間彌生の「赤いカボチャ」を見ることです！

